

設置（明治九年）による西洋美術移植であるが、既述のような伝統美術の衰微に対しても全く無為無策であったわけではなく、明治四年に大学（のちの文部省。当時の大学大丞は佐野常民^{文政五年〜明治三十五年}）の献言を容れて古器物保護の太政官布告を発し、同年文部省（文部大丞町田久成^{天保九年〜明治三十年}）を設置するや、ここに博物館を置き、古器物の収集、保存、展観の業務に着手させるなどの措置をとっている。

博物館の設置は文化財保護行政の端緒となったものであるが、しかし、当時の規模は貧弱で、しかも、殖産興業路線に組み込まれて行ったため、文化財保護機関としての機能は十分に果たし得なかった。物品の保存に関する措置はかくのごときであり、一方、美術家の保護についてはなんらなす所が無かったといっている。

ところが、明治六年以後、政府は一転して美術行政に力を入れ始める。その契機となったのはウィーン万国博覧会への参加であった。それは新政府にとって初めての経験であり、西欧技術導入と貿易拡大の絶好の機会であったから、政府は国をあげて参加することとし、準備には特に念を入れた。そのためワグネル（Gottfried Wagner 1830〜1892。大学東校御雇教師、化学担当）に出品顧問を依頼し、その指導のもとに日本の伝統的美術工芸品を中心に出品することとした。欧米先進国が工業力を競い合う万国博覧会で対等に競い得る力が日本に無かったためにこの措置をとったのであるが、それは予想を遙かに越えて大好評を博し、新政府が国際舞台に初名乗りをあげるに相応しい躰となったばかりでなく、美術工芸品の海外需要が激増するきっかけともなった。この成功により、政府は以後特に外

貨獲得の観点から美術工芸の奨励に意を用いるようになったのである。明治七年には政府の援助のもとに起立工商会社（同二十四年に経営難により解散）が発足。同社は多くの工人を雇い入れて大規模な美術工芸品製造を行い、ニューヨークやパリの支店を通じて販売し、大いに外貨獲得の任を果たすとともに、政府が海外博覧会に参加するたびに情報提供等の役目も果たした。社員の中にはのちに本校に關係した者が多く居た。まず、社長の松尾儀助は本校商議委員となり、蒔絵の工人であった小川松民、金井清吉、白山福松は本校漆工科の指導者となり、金属彫刻の工人杉浦清太郎、同滝次郎は本校彫金科の指導者となる。同科の中心的指導者となる加納夏雄も同社の受注製作に携わっていた。

このような奨励策は美術工芸分野の一角に活気をあたえ、伝統を見直す気運をある程度呼び起こした点で効があったが、しかしそれは飽くまでも富国策の一環としてとった策であって文化政策ではなく、したがって美術行政と称するに足るものではなかった。この傾向はのちのちまで尾を引き、やがて岡倉覚三らの運動によって改革が加えられることになる。

内国勸業博覧会の美術

明治七年、内務省が創設され、大久保利通が初代内務卿に就任。富国強兵を目標とする勸業政策を本格的に推進し始めるが、大久保は海外博覧会への参加を西欧先進技術の導入及び輸出拡大の手段として非常に重く見、翌八年のメルボルン万国博覧会の際から参加

務を内務省管轄下に置き、また、国内でも勸業博覧会を逐次開催することとした。その結果、明治十年には上野で第一回内国勸業博覧会が開催された。それは、ちょうど西南戦争のさなかであったが、鉱業冶金術、製造物、美術、機械、農業、園芸の各部門に全国から多数の出品物が集まり、連日観衆で賑った。

第一回勸業博覧会の美術の部門は六つに区分され、第一類（彫刻）には仏像や歴史人物像、人形等をはじめとして煙管、根付その他装身具類、印章、家具調度品等々、種々雑多な製作物が展示され、その中で当時輸出品として脚光を浴びていた牙彫の出品が特に盛況を示した。これらの展示は当時の人々の彫刻というもののとらえ方を如実に顕わしている。

第二类（書画）には日本画、日本画顔料、書、油画、縫箔、蒔絵諸器その他が、第三類（刮削）には版画、版木の類が、第四類（写真）には名所や人物の写真などが、第五類（工案）には各種建物雛形が、第六類（嵌装）には象嵌金属器、木工品、貝や鼈甲細工が展示された。

右の展示は我が国最初の官設公募展覧会ともいうべく、これによって当時の美術界の姿が露呈されたわけであるが、特に注目すべきことは油絵の出品が盛んだったことである。受賞者の中にも日本画の菊池容斎、安田老山、瀧和亭、渡辺小華、川端玉章、幸野楳嶺、野村文挙らに伍して五姓田義松、山本芳翠、高橋由一、五姓田ユウ、本多錦吉郎、亀井至一、田村宗立ら洋画家の名がみえる。このような絵画の状況について、博覧会顧問のワグネルは報告書の中で次のように述べ、伝統画法保存のための教育に着手するよう政府当

局を促した。

今回上野博覧會ニ於テ日本畫工ノ現今専ラ油畫ノ術ヲ窮メ筆力健快最天然ノ眞態ヲ寫スニ巧ナルニ至ルヘシ然レハ時好ノ油畫ニ移ルスノ如ク速カナルハ日本美術工業ニ裨益スルヤ否ヤハ未達カニ論シ易カラス然リ而シテ夫ノ縑紙ニ畫ケル水墨ノ如キ古來相傳ノ風格ヲ失ハサルヲ務ムヘシ否ラサレハ則チ年ヲ積ミ月ヲ累ネ從ヒテ美術ノ眞源ヲ滅失スルニ至ラン蓋シ新奇ノ時好ハ必スシモ古有ノ畫法ヲ壓倒スルニ至ラサルヘシトイヘハ宜ク更ニ講堂教場若クハ博物館ニ於テ練熟ノ教員ヲ撰ヒ以テ古畫ノ各式ヲ保存シ旁ラ日本畫術ノ秘訣ヲ失ハサラシムヘシ

〔ドクトル、ワグネル氏 明治十年 内国勸業博覧会報告書〕東京国立文化財研究所美術部編『明治美術基礎資料集』昭和五十年刊

なお、のちにフェノロサや岡倉寛三のよき協力者となり、東京美術学校の設立や運営にも関与する河瀬秀治（号雲影。天保十二年〜明治四十年）はこの博覧会るとき事務官長をつとめたが、出品された美術工芸品の状況を次のように述べている。

就中美術工藝品の其慘憺たる状態はなか／＼今日から想像の出來ぬ程である。剩さへ此の時一方は西洋空氣で滿されて、椅子に腰をかけなければ人間でない様に云ひ、何でも舶來で無ければ不可ぬ、日本と名の付たものは取るに足らぬと云ふ様な傾向で、此の洋醉の潮流は亦如何ともすることが出来なかつた。そ

の一例を挙げますれば、彼の有名なる加納夏雄の彫刻の如きは、舊幕時代に製作せられたものと、此の博覽會へ出品せられた物とを比較するに、實に別人の手に成つたかと思はれるほど劣つて居りました〔加納夏雄の内国勸業博覽會への初出品は明治十四年の第二回博覽會のときであるから、この点は河瀬の記憶違いであろう。―編者註〕、世間境遇の如何に依て、これほどまでに違ふものかと嘆息したことです。この博覽會出品の報告書は、各部の主任で出来ましたが、私は特に美術部に就き意見書を出しました。然るにこの時は、大久保内務卿が兇刃に仆れて、今の伊藤侯が代つて内務卿になつた、此の人は當時西洋の空氣の外、思想を引かぬ人でしたから、恐らくは私の意見書の如きものは手にも取らなかつただらうと思ふ。

〔美術界の今昔〕河瀬秀治談『日本美術』第八十号。明治三十八年十月)

このように博覽會主催者側の人々の中に伝統的美術の衰微を憂え、保護を訴える人が現われたが、国政に反映されなかった。前述の文部省博物館は明治六年には博覽會事務局に統合され、古器物保護の啓蒙のための博覽會を開いたりしてはいたが、同八年、博覽會事務局が内務省所管となり博物館と改称されたのちは、古器物保護の業務は片隅へ追いやられてしまった。町田久成や蟻川式胤のように正倉院御物や古社寺宝物の保存策を講じるよう訴える人たちはいたが、政府当局の関心を引くに至らず、その間に文化財の散佚、海外流出が続き、一方、優れた伝統的技法も絶滅の危機に瀕していたのであった。

龍池會

富国策の推進者である官僚たちの間には右のような危機的状況を打開するために民間ベースで活動を開始しようとする動きが生じ、その結果、明治十二年三月に龍池會が結成された。会名は上野不忍池畔の天龍山生池院で初會を開いたことに因む。會頭は佐野常民（元老院議員）、副會頭は前出の河瀬秀治（大藏省大書記官商務局長）で、両者はともにウィーン万国博覽會以来、相前後して海外博覽會参加の指揮にあたった官僚であり美術愛好家であった。当初の会員は二十六名で、大半は官僚と輸出業者が占めていた。彼らは毎月不忍池弁天の社内に古美術品を持ち寄って評論會を開いた。翌十三年六月には機関誌『工藝叢談』を創刊している。このように小さい団体であったが、佐野會頭はこの十三年二月に大藏卿に就任しており、會の前途は洋々たるものがあつた。かくて、日本画各派の画家たちも次々と入會し、年を逐つて發展し、明治二十年には日本美術協會となるのである。

なお、同會結成より二年後には姉妹団体とも言うべき彫刻競技會（會頭河瀬秀治）も発足している。これは第一回内国勸業博覽會を契機として生まれた勸工会と称する彫工、製造販売業者らの組織が發展したもので、のちに伝統的彫刻家の全国的組織である彫工会となり、最終的には日本美術協會に吸収される。

さて、明治十年代には一般に従来の極端な欧化主義に対する反発としての国粹主義的動向が現れ、二十年代、それが著しい興隆を示